『言海』初版本（私家版）の復刻本
『言海』は最初は私費で出版された。1889年（明治22）に第１冊と第２冊、翌年には第３冊、そして1891年（明治24）に第４冊を出し刊行を達成した。『言海』完成祝賀会には伊藤博文らが出席している。

『言海』の自筆稿本
全３２冊（宮城県図書館蔵）
五十音順に編まれている。

『広日本文典別記』自筆原稿
（宮城県図書館蔵）
左側の丁（ちょう）に、「国語の統一は独立たる基礎にして、独立たる標識なり」とある。文彦の毅然とした国語に対する思いが記されている。

る国語辞書の編纂を命じられている。文彦29歳だった。政府は『語彙』の失敗から、国語はもとより英語にも詳しい文彦を選んだ。編纂事業は最初、国学者の榊原芳野（さかきばら・よしの）と二人で出発したが間もなく文彦ひとりにすべてがまかされることになった。

遂げずばやまじの精神

以来、17年にわたる言葉との格闘が始まる。最初は、定義の明確性を特徴とするウェブスターの英語辞典にのっとり、そこに収録されている語の注釈を翻訳し、日本語にあてはめていけば、おのずから目指す辞書は出来上がると考えた。

しかし、実際にその作業を行ってみると、日本特有の古語などですでに意味がわからなくなっているもの、品詞の区別がつかないもの、アメリカと日本では同じ名前でも形や色彩が異なっているものなどがあり、頁ごとに空白の部分がいくつも残った。これを埋めるのは至難の業であった。

文彦は『言海』の後書きに次のように記している。

「これぞ此編輯（へんしゅう）業の盤根錯節（ばんこんさくせつ）とはなりぬる。筆執（と）りて机に臨（のぞ）めども、いたづらに望洋の歎（たん）をおこすのみ、言葉の海のたゞなかに櫂緒（かいを）絶えて、いづこをはかとさだめかね、たゞ、その遠く広く深きにあきれて……」

一つの外国語の語源を求めて、何冊もの本、何人もの人、何日の日数もかけて解決に向かう。列車のなかで聞いた方言をその人に問いつめて煩（うるさ）がられたり、他人には奇異に映る行為も少なくなかった。

危機が何度も文彦を襲った。敬愛する父が編纂開始後３年目に逝った。1886年（明治19）、12年もの辛苦の末に脱稿し、文部省に原稿を提出したが、理由も示されないまま刊行されなかった。やっと自費出版を許されるが、校正の最中に愛娘と妻が相次いで亡くなった。また、予約者に刊行の遅れを「大虚槻（おおうそつき）先生の食言海（しょくげんかい）」となじられたりもした。

そのたびに文彦に力を授けたのは、他ならぬ祖父玄澤の「およそ、事業は、みだりに興（おこ）すことあるべからず、思いさだめて興すことあらば、遂げずばやまじ、の精神なかるべからず」という言葉であった。

五十音順にほぼ４万語を収録

幾多の曲折を経て、1889年（明治22）から1891年（明治24）までに『言海』全４冊が刊行された。国語辞書編纂を命じられてから、17年の歳月をかけた大事業であった。

『言海』はわが国国語史上の金字塔となった。ほぼ４万にのぼる語を、これまでの辞書のようなイロハ順ではなく、五十音順に配列、語の分類を体系化し、文法を確定した近代的な普通語辞書の嚆矢（こうし）となったのである。

文彦は、『広日本文典別記（こうにほんぶんてんべっき）』の序論で次のように書いている。

「一国の国語は、外に対しては、一民族たることを証し、内にしては、同胞一体なる公義感覚を固結せしめるものにて、即ち、国語の統一は、独立たる基礎にして、独立たる標識なり」

国語の統一は一国の独立の基礎、近代国家には近代的国語辞書が要る――文彦の思いはようやく結実した。

文彦はその後も『言海』の増補改訂に努め、死後４年目の1932年（昭和７）に『大言海』として刊行された。

（宮城県図書館資料奉仕部長　竹内英典）